

## 念仏者・中村久子：人間となる歩みによせて

著者	田 正城
雑誌名	真宗文化：真宗文化研究所年報
巻	16
ページ	73-128
発行年	2007-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000684/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000684/</a>

論文

# 念仏者・中村久子

——人間となる歩みによせて——

高田正城

1. はじめに
2. 中村久子の生涯（年譜・長尾重輝氏制作）
3. 「真宗の宿業観」の顕証者
4. 念仏者・中村久子——讃仰と批判のあいだ——
5. おわりに——願いとして——

## 1. はじめに

（いとほしみいとほしみつつわが魂をかきいだきつつけふもみつむる 久子）

### 「中村久子の世界」展を終えて

わずか三歳で両手両足の切断という苦難に出会いながら、その障害の事実を身に引き受けて、七二年間の人生を生き抜いた中村久子。女性として、母として、そして何よりも一人の人間として生きぬいたその生涯は感動の人間ドラマとして、近年その著書や伝記のみならず、TV番組などのメディアを通じて広く紹介され、多くの人の心に「生き

る力」を与え続けている。

平成14年11月22日(金)～28日(木)に、本学園の主催で開催された「中村久子の世界」展は、多くの方々のご支援、ご協力により好評のうちに終了することができた。その詳細は本稿では割愛するが、「女性の真実を実現すること」を目標として教育活動を展開している光華女子学園にとって、大変意義深い催しであったと思われる。

今回の催しで、本学園は特に【障害者として】【妻として母として】【念仏者として】という三つの視点から、中村久子の生涯を見つめ直そうとした。

本稿では、障害者であり、女性であるという「身の事実」を機縁として真実に目覚めていく久子について、主として【念仏者として】という視点からの一考察を述べたい。

## 2. 中村久子の生涯

(あけどきにみし夢はしも友と二人荒野をかくる我に足あり 久子)

中村久子の生涯については、「中村久子の世界」展パンフレットに詳述した。さらに詳しく知りたい方には、自伝「このころの手足」をはじめ、後述する、熱心な研究者による複数の伝記が存在するので、そちらを精読していただきたいと思うが、本稿では「中村久子の世界」展パンフレット記載の年譜(真宗文化研究所職員、長尾重輝氏制作)をほぼそのまま再録することで、久子の生涯の概略を紹介したい。

中村久子年譜

一八九七年	一月二五日、飛騨高山市に父釜鳴栄太郎、母あやの長女として生まれる。
一八九九年	足の霜焼けがもとで突発性脱疽となり、ついに両手両足を失う。
一九〇二年	五歳の秋、弟栄三生まれる。
一九〇三年	七歳の夏、父の死に遇う。母とともに実家丸野家に帰る。
一九〇四	身体障害の為小学校入学不能となる。八歳の秋、母の再婚により藤田家の一員となる。一〇歳の春、弟栄三(五歳)
一九〇七年	岐阜県加納育兒院へ送られ、生別。
一九〇七年	このころより独学と母の厳しいしつけが始まる。久子一歳の時、母は出稼ぎに行くことになり、祖母丸野ゆきから読み書き等教育をうける。
一九一四年	「丹後の小父」から見世物小屋で働くことを持ちかけられる。
	一月六日、自ら見世物小屋に身を売り、荷車に載せられて郷里高山を出る。
一九一六年	二月一日、名古屋大須「宝座」で「だるま娘」の看板で、見世物芸人の生活が始まる。
	以後、日本全国はおろか朝鮮・台湾・満州まで巡業に流れ歩く。
	書道家沖六鳳氏に書道の指導をうける。
一九二〇年	五月、弟栄三、八月、母あやと相次ぐ肉親の死。
	秋、婦人雑誌「婦女会」に懸賞実話一等当選。
一九二二年	中谷雄三と結婚、翌年八月、長女美智子生まれる。
一九三三	九月、関東大震災のさなか祖母丸野ゆき、夫雄三と相次いで逝く。
一九二四年	夫の死を機に一座を離れ、独立して興行を始めることになる。
	一月頃、進士由太と結婚、翌年八月に二女富子生まれる。
一九二五年	一〇月、進士由太と死別。
一九二六年	定兼俊夫と結婚。
一九二七年	四月、三女妙子生まれるも、翌年二月死別。

一九二九年	雑誌「キング」に紹介されていた(座古愛子)という人の記事に目をとめる。後年、久子は「座古愛子女史の一生」を編著刊行し、女史の法要も行うほど、彼女の影響は大きく、また、交際は深いものであった。
一九三三年	定兼俊夫と秋に離婚し、中村敏雄と結婚。
一九三四年	愛知県三河で蓮如上人法要の興行中、真宗専門学校教授、「無我愛哲学者」として有名な思想家伊藤証信夫人の朝子氏と面識を得る。朝子氏を縁として伊藤証信師の「無我愛」の精神に触れる。(後に伊藤師の紹介で暁島敏師にも会見を果たしている)
	芸人生活を止め上京。
一九三七年	四月一七日、東京日比谷公会堂において、世紀の聖女ヘレン・ケラー女史と会見(会見回数は昭和一二年、一三年、三〇年の三回)、口で縫った日本人形を贈る。この頃から、講演に出るようになる。
一九三八年	書道家福永鷲邦氏を知り、「歎異抄」を教えられる。(この頃、芸人生活を再開)
一九四〇、 一九五四年	高山に居住し、巡業が終わると高山別院へ身を運び多くの法座に遇う。この頃、特に真宗念仏の教えを教導し、歌道にも導いた師は藤山治定師と牧野専幸師であった。
	戦後まもなく山田無文老師と出会う。老師は久子の最晩年にも、座古愛子女史の法要の導師を請われてつとめている。
一九四二年	一月、津市の観音祭の興行を最後に、二三年間の見世物芸人の生活に決別する。
一九四三年	六月、「宿命に勝つ」刊行。
一九四六年	このころより講演活動、施設訪問活動を開始、夫や娘の背に負われて死ぬ直前まで続けた。「生きる力を求めて」等書籍を刊行、諸雑誌で活躍。静岡県身体障害者福祉大会で表彰、厚生大臣賞受賞、高山身体障害者協会初代会長。
一九四九年	五月、「無形の手と足」刊行。
	京都府立盲学校においてヘレン・ケラー女史と三回目の会見をする。
一九五一年	一〇月一五日、「生きる力を求めて」刊行。
一九五五年	九月、「私の越えて来た道」刊行。
一九六一年	五月、身体障害者の代表として天皇陛下に拝謁を賜る。
一九六二年	四月一二日より三日間、NHKラジオの「人生読本」で、「御恩」と題して放送。
一九六五年	九月五日、高山市国分寺の境内地に母を顕彰し、悲母観音像を建立、開眼法要を営む。

一九六七年	八月六日、座古愛子女史の二三年忌の法要を、神戸祥福寺と神戸女学院でつとめ、「座古愛子女子の一生」を編著刊行。
一九六八年	三月一九日、高山市の自宅において永眠(脳溢血)、七十二歳。普行院釈尼妙信。

### 3. 「真宗の宿業観」の顕証者<sup>けんしょうしや</sup>

(もえさかるこの煩惱をいかにせむただみ仏のみ手のまにまに 久子)

#### 「中村久子」が語りかけるもの

中村久子が七二年の生涯を通じて私たちに語りかけてくれるものは、如何なるものであろうか？

一般的な理解としては、「両手両足の切断という、極限的な苦難をのりこえて力強く生きぬき、多くの人に希望や勇気を与えた人」ということになるのだろう。

もちろん中村久子理解のきつかけとして、こうした見方を否定するわけではない。むしろ、多くの若い世代の人たちが、積極的に「中村久子の生涯」に触れ、そこから深い感動を受けている事実に接して、教育現場に身を置く一人として、大きな救いと喜びを感じている。

しかしながら、である。

「中村久子」という存在が、私たちに示してくれる、最も重要な課題は、おそらくこうした「偉人伝的側面」ではあるまい。

そうでなければ、その時は大きな感銘を受け、その感動の断片を自己の日常生活に信条として生かすことはあっても、やがてはその存在自体が薄れ、立派な雲の上の人にはなっても、基本的には自分たちと無関係の存在になってしまうであろう。

久子は決して偉人として生きたのではなかった。

自分の身をもって「人間という存在」についての問いを發し、「真宗」に出遇おうとしたのだと思う。救いがたき、迷い多き私たち凡夫の一人として、苦難の現実を離れることなく、その真つ只中にあってこそ、仏教を証明する存在となったのだと思う。

それはある意味で、久子の生きた時間や空間を超えて、直接「現在」を生きている私たちに呼びかけてくる普遍的、根元的な声であり、願いではないだろうか。

中村久子という存在のかけがえのなさは、実にこの一点にこそ存する。

### 「自力」と「他力」

ところで、「歎異抄」を通じての「親鸞のおしえ」(すなわち「他力・念仏のおしえ」)によって「真実の生き方に出遇った」と語る久子だが、彼女ほど「自らの力で道を切りひらいてきた」というイメージで語られてきた存在も少ない。後述するＴＶ番組等で大反響を呼んだのも、そうした「力強い生き方」に強烈な印象を受けた人々の多さを物語っているし、前述の展示会を見た本学園の学生・生徒・児童の感想文の中にも、久子のそうした側面に対する純粋な讃美の表現が多々見られた。

つまり、およそ世間的な意味で手垢の付いた「他力本願」という言葉からは連想しにくい生き方がそこにはあるようである。

しかしながら、一方で「歎異抄」に出遇う前の久子自身は、どんな苦しみにも負けずに「頑張ってきた」自分に対して、「正義の高み(自力を誇る姿勢)」に立っている」という内省の目を向け、「そこから生じる悲しみや苦しみはいつまでも消えなかった」と語っている。そして、「親鸞のおしえ」に本当に目覚めることによって、悩みも、苦しみ

も、悲しみも、よろこびや感謝に変わる生き方が生まれてくるのだと気付いていく。

### 「真宗に遇う」

思い描いた「理想」の実現をめざし、ささやかに、或いは必死に続けてきた自分の努力が、過酷な「現実」の一撃によって、もう崩壊する。

これは、多かれ少なかれすべての人間の上に等しく訪れるものであろう。そうした事態に立ち至った時、人はその事実を「承知できない」「納得がいかない」と思いながらも、冷徹なる現実を前にして、深い悲しみに押しひしがれ、苦しみもがくのみである。生きる意欲そのものを失ってしまう人もいるかもしれない。そんなとき、その人の胸中に渦巻いているのは、きっと「なぜ、私はこの苦しみを生きなければならぬのか？」という真つ黒な問いである。

しかし、実はこの「なぜこの苦しみを生きるのか」という問いこそが、「真宗(真実の宗教)に遇う」こと、言い換えれば「人生の方向転換」をもたらす機縁に他ならないのである。

生きるために、まさに超人的な「自力の努力」を続けてきた久子が、そうした自力の母なる「他力のはたらき」に目覚め、どのような現実にも遭遇しても、「目に見えない大きな力、大きな光が自分を照らしてくれている」ということに目覚めていくためにも、まさにその「問い」が必要であった。

### 中村久子と「宿業」

中村久子の生涯に即して、この「問い」を明らかにする際に触れておきたい言葉がある。

それは「宿業しゅくごう」という言葉である。



久子の信仰の内実を、親鸞の思想、殊に「歎異抄」との関連を中心に明らかにする作業は予想外に難しい。「歎異抄」との関連を具体的に示す記述が、著書や文献の中にもそう多くはないからである。しかし、何度もこれらの書を読み返すうちに、久子の信仰にとって「宿業」という言葉が、キワードになるのはあきらかであると思われる。

もともと「宿業」は、従来「身の不幸を宿命として甘受する」という意味合いで語られることが多かった言葉でもある。

だが久子は、「宿業」を、「自己の身の事実を機縁として、真実の世界に目覚めていくという開かれた境地」という意味で用いている。

われわれはそのことに注目していかなければなるまい。

### 「王舎城の悲劇」

中村久子の「自己」という存在のすべてをかけたの問い」と「宿業」の問題を考えるにあたり、自然に想起されてくる聖典の一場面がある。

「仏説観無量寿經」における「王舎城の悲劇」である。

〈本項の主題と直接の関係はないが、「仏説観無量寿經」(通称「観經」)は奇しくも、本学園の「光華」の名の由来となった「その光、華のごとし」(水想観より)という、阿弥陀仏の浄土への讃美の表現を含んだ、浄土真宗の根本聖典である。「浄土三部經」の一つ。他の二つは「仏説無量寿經」と「仏説阿弥陀經」〉

釈尊在世当時のインドの大国、マガダ国の都王舎城の王宮で起こった一大悲劇が、そこには描かれている。

ここに阿闍世<sup>あじあせ</sup>という一人の太子がいた。悪友提婆達多<sup>だいばだつた</sup>(釈尊のいとこで弟子でもあったが、反逆したといわれる人物)の教えに従って、父である王頻婆娑羅<sup>びんばしら</sup>をとらえ、七重の室内に幽閉し、それを救おうと献身的な努力を重ねた王

后韋提希も、ついにそのことが息子である阿闍世に発覚し、阿闍世の怒りによって殺されようとする。

何とかその場の危機を逃れた韋提希だったが、阿闍世によって夫と同じように牢に幽閉されてしまう。

悲しみと愛いの中にある韋提希の前にあらわれた釈尊に向かって、韋提希は、やり場のない自らの心をおつける。

時に韋提希、仏世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち、身を挙げて地に投ぐ。号泣して仏に向かいて白して言

さく、「世尊、我、宿何の罪ありてか、この惡子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷屬たる。」

『仏説觀無量壽經』ではこの韋提希の「問い」をきっかけに、釈尊はこの後「穢土」を厭い、「淨土」を願う韋提希の求めを確かめながら、韋提希が真に求めるべき世界、「阿弥陀仏の淨土」を説いていくことになる。この展開がまさに淨土真宗（親鸞のおしえ）の核心に触れていく過程でもある。釈尊の説法の内容はもちろん、悲劇の発端となった阿闍世の出生の秘密や、反逆者提婆達多などについて、『觀經』のみならず、その註釈書や、他の經典、親鸞の著作の中にいくつもの重要なテーマが登場するのだが、ここで触れる余地はない。多くの研究者によるすぐれた研究書が存在するので、関心のある方はぜひその方面の書物をご精読いただきたい。

本稿ではこの「韋提希の問い」が、そのまま「中村久子の問い」に重ね合わさっていく意味合いにおいて考察を重ねたい。

### 「私とは何か」という問い

この「韋提希の問い」は、表面的には全く愚痴と怨嗟、そして責任転嫁に満ちた言葉に思える。しかし、この言葉

を吟味していく過程で、われわれは「韋提希の問い」が「われわれすべての人間の問い」に変化していく様子を目の当たりにすることになる。

これまで、心を込めていつくしみ、育ててきた我が子、そういう親の期待に応えて当然親孝行を尽くしてくれるべき我が子によって、私はこのような苛烈な現実と直面させられている。そんな現実があるはずがない。そんな現実には納得できない。しかし、自分の思いを超えて現実には存在している。自分が今その現実の中にいることを動かすことはできない。

ここでようやく、韋提希に次の点が見えてくる。

自分が今まで確かだと信じていた、その一切が自分にとってわからなくなってしまった。わかったつもりで生きてきたことの全体が全く不明であったことがようやくわかった、と。

ここで釈尊の姿に接した韋提希は、王后としてのプライドも、母の温容もかなぐりすてて、前記の問いを発するのである。

「世尊、我、宿何の罪ありてか、この惡子を生ずる。」

「韋提希の問い」は、このような具体的なものであった。

しかし、それを根元的な意味をふまえて言い換えると、おそらく「私はなぜこの苦しみを生きるのか?」「私は何のためにこれまで生きてきたのか?」さらには「私とは何か?」「自己とは何か?」という言葉に置き換えられるのではないかと思う。

苛烈なまでの現実によって自分の思いが崩れていくその中でこそ、人間が真の教えに出遇う機が熟する。

自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり。<sup>(2)</sup>

明治の先哲、清澤満之<sup>いさざわみつし</sup>が言い切ったように、こうして自己という存在自体への問いを発せざるを得ない状況が生まれ、この「自己」という存在のすべてをかけての問いこそが、人をして「真宗(真実の宗教)に遇う」こと、言い換えれば「人生の方向転換」へ導いていくことになるのである。

### 「悲しみの底」から見えてくるもの

真実の宗教とは、決して「現実を運命としてあきらめさせる方法」を説くものではない。真実の宗教は、むしろ人間を運命の鎖からを解放して、本当の意味で「現在の現実」に安心できる道を開くものである。

真実の宗教とは、「苦悩から逃れようとする心」を、押さえつけるのではなく、苦悩そのものの意義を明らかに知っていくことによって、悩みの心を自ずから開放させていく道である。それによって、自分が引き受けることを拒み、だれかに代わってもらいたいと思っていた現実を、「だれにも代わってもらわなければならない、大切なもの」として受け取っていく自分自身が育てられていくことになる。

人生において、「幸福」と呼びうるものがあるとすれば、それは苦しみの彼方にあるものでもなければ、悲しみの現実を無理にあきらめるところにあるものでもない。苦しみや悲しみの中にありながら、開かれていく自分自身の心の中にこそ見いだされる境地ではないであろうか。苦しみながらもその苦しみの中にこそ、悲しみながらもその深い悲しみの底にこそ、見えてくる喜びがあるのではないだろうか。

われわれはそれをこそ、「真の幸福」と呼びたい。

「王舎城の悲劇」は、まさにそうした苦悩の現実を通じて、すべての人間が「仏」に出遇い、「真の幸福」に出遇う過程が描かれている。

親鸞が「教行信証」総序において、

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。しかればすなわち、浄邦縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗せん提を恵まんと欲す。<sup>(3)</sup>

と、その感動を語っている意味が、ここにあるのである。

そして、中村久子もまさに「悲しみの底の底」で、この光に出遇った人であり、同じく苦悩を生きる「我々のため」にあらわれてくださった人々」の一人ではなかったか。

## 辛酸の中で

中村久子が「韋提希の問い」を自らのうちにも問い、自己の存在についての根元的な疑問を発するのは、私見では一九二八年(昭和三年)～一九二九年(昭和四年)のころではなかったかと思う。

三歳で手足を失いながら、母の厳しいしつけによって食事や裁縫など日常の仕事を自分一人で出来るようになった久子は、強く自立を願って二〇歳で見世物小屋の芸人になる。

苦勞多き日々の中で二四才の時、一座の若者中谷雄三と結婚、やがて長女美智子が生まれ、妻として、母としてやさやかな幸せを感じる日々。だが、わずか三年で夫雄三は腸結核により亡くなり、時を同じくして、自分を支えてくれた祖母ゆきも死去。

その後、二七才の久子は進士由太と再婚。翌年次女の富子が生まれる。しかし、再婚二年後に進士は急性脳膜炎で急死する。

生活のため、久子は興行関係者・定兼俊夫と再々婚し、三女の妙子が生まれるが、はしかがもとで一年足らずのう

ちに死亡。また夫と信頼関係を結ぶことができず、芸に打ち込むことでかろうじて自分を支える久子だった。

悲しい出来事の連続に絶望した久子は、「なぜ私ばかりがこの苦しみを生きるのか？」と世をのろう気持ちと、手足がないことへの腹立たしさがしだいに鬱積<sup>うっせき</sup>していった。

世をのろい恨む気持ちも、出てきました。そして手足の無い事に腹が立つて仕様がな——。切れ風のようなはかない運命に、愁いと悲しみは波紋のようにひろがって行く、どこまでも果しなく——。<sup>(4)</sup>

ちょうど、二番目の夫、進士由太を亡くしたころに、久子の口から漏れた慨嘆である。

「妙子ちゃん、どうして死んだのウ。お母ちゃんをかんになして……。妙子ちゃん、もう一遍だけお目々をあけて——。」まだ、ぬくもりのある桜色した可愛い頬に顔を押し当てて、声をかきりに泣きました——。<sup>(5)</sup>

これは、三度目の夫、定兼との間に生まれた三女妙子が、はしかのために急逝した際の心の叫びである。

四肢切断の身を生きぬくために、文字通り超人的な努力を重ね、眼前の壁の一つ一つを突き破り、あるいは乗り越えてきたかに見えた久子。

これまでどんな苛酷な現実にも決して屈することのなかった久子だったが、ようやくつかんだささやかな幸せがもうくも崩れ去り、そればかりか次々とわが身に押し寄せる悲しい出来事の連続に、その心は深い闇に包まれることになる。

またこの頃、久子は子供を人に預け、興業や家庭の経済状況、夫の放蕩、自身も再発した胸部の疾患(結核)を抱

えるなど、背負い切れぬほどの苦悩にあえぎ、夜中も眠れなかったという。神経衰弱になっていた久子の顔を見て、小屋の若い衆が「ねえさんの目は、ふくろうの目のようで恐い」と言っていたのもこの頃であったという。

彼女は今日まで亡き両親をうらみ、四肢のないわが身を何度呪ったか知れなかった。

「親の存命中になぜ私は死ななかったのか。親なきあとの何十年を、両手両足のない子が生きることが、資産のない身では大変なことなのに、なぜ親は私を放置したのか。無手足の女に、神さまや仏さまはなぜ子供を生ませたのか」

久子の胸にはいつも疑問とうらみ、呪いと憤懣がうずを巻いていた。

「神さま仏さまはどこまで私を痛めつけるのか」

久子は今日まで神も仏も呪わしかった。<sup>(6)</sup>

しかし、久子がまさに「なぜこの苦しみを生きるのか?」という問い(韋提希の問い)を自らの裡に問いかけていたこの時期にこそ、転機が訪れる。

#### よき人々との出遇い

久子の場合、その転機はまず、「よき人々との出遇い」によってもたらされ、「真実の道」への機縁が醸成されていく。

## 「座古愛子(クリスチャン)」

心が闇で閉ざされていた昭和四年頃、自分で動けぬ体であっても、親に不平も言わず、他人の幸福を神に祈っているクリスチャンの座古愛子に出遇って、久子は初めて心の目が覚めた。当時無宗教だった久子だったが「生かされている」ことを、はつきりと心の底の無言の声に聞いた。

## 「伊藤証信(思想家) 朝子夫妻・千葉耕堂(宗教評論家)」

昭和九年、伊藤証信の「無我愛」の精神に触れ、やがて千葉耕堂の知遇も得た久子は「パンの問題はあとまわしに、精神上の心を糧に生きたこと」を決心し、深い求道心を芽生えさせることとなる。やがて「中村久子後援会」の世話で、学校や施設、寺院などで、自らの体験を話すようになった。

## 「ヘレン・ケラー」

昭和一二年、へ奇跡の人ヘレン・ケラーと会見した久子は、彼女から「私より不幸な人、そして偉大な人」という言葉を贈られる。

後年久子は「女史のお心の幾分でも私の心の上に学ばせて頂きたいと念じております」と語った。

## 「歎異抄」との邂逅

ヘレン・ケラーとの会見により、久子の存在は広く世に知られるようになる。しかし、同時にこの頃、久子は人前で苦心談を語る自分の心の奥に「慢心」を自覚し始め、自らを深く掘り下げることができないという「精神的行きづ



まり」を感じて、深く悩んでいた。

昭和十三年(一九三八年)、久子は東京で行われた講演会で、熱心な真宗の信者であった書家の福永鷺邦氏ふくなががはと出会い、真宗の話聞いた。

そして、幼かった時、祖母にきかされたご開山様のお話を、先生のお口からきかせて頂いた時、祖母のおもかげが、このところの中にはつきりと見ることができ、長い間、土の中にうずめられていた一粒の小さい種子がようやく地上にそうつとのぞいて、出始めた思いがしたのであった。

久子の目の前には、ようやく細いながらも真実の道が開かれようとしていた。数々の苦難に心が闇に閉ざされ、「なぜこの苦しみを生きるのか?」という問い(韋提希の問い)を自らの裡に問い、座古愛子らとの出会いで立ち直ってから九年の歳月が流れようとしていた。

これまでに、久子は多くのへよき人々と出遇っている。

幼少期の自分を守り育ててくれた父、母、祖母、自分を支えささやかな幸せをくれた夫たち、そして絶望の日々の中で、新たな道を教えてくれたクリスチャンの座古愛子、無我愛提唱者の伊藤証信夫妻、宗教評論家千葉耕堂、それにヘレン・ケラー、後援会の人々……

しかし、ここにおいて明らかになったのは、幼い日に祖母が蒔いてくれた「念仏」という種が、苦難の日々と多くの出遇いの中から、今こそ「真実」という芽を出そうとしているという事実であった。

多くのへよき人々によって、久子の心にもされた「心の灯」を縁として、今、久子は明確な自覚の下に「真実の宗教」に出遇おうとしていた。

福永鷺邦氏によって、大須賀秀道著「歎異抄真髓」おおくさ しゅうどう たんにしやうしゆすいを紹介された久子は、そこにあった「お念仏なさいませ、一切は仏様におまかせすることです。どんな時も仏様は私たち衆生をいだきかかえていて下さいます。お念仏させてい

たadakimashou」という言葉に、旱天に慈雨の思いをする。まさに一大転機であった。

与えられた境遇より外に如何ともできぬ私なのでした。それより外に致し方のない自分なのでした。自分をはつきりと見せて下さった。そして自分の行くべき道を法の光りもて照らして下さった。爾来私の崇拜的、人間親鸞様であります。

業のある間、何十年でも見世物芸人でいいではないか。止めるとほとけ様がおっしゃる時が来たらやめさせてもらえばよい。来なかったら業の尽きるまで芸人でいよう。こう決心がついたら煮えたぎっていた「るつば」は「るつば」でなくなりました。<sup>(7)</sup>

久子の上に念仏の信心が決定したのである。

『歎異抄』に出遇った久子は、障害を克服し強く生きてきた自分を大衆の前で語るといふ自身のあり方の中に「慢心」が満ちていたことに気付き、今まで自分を苦しめてきた事柄や人物でさえ、実は自分を生かし支えてくれた大きな「光」であったと感じ取るようになっていった。そして、芸人活動を再開するのだった。

### 「人間となる歩み」

中村久子女史顕彰会会長の三島多聞師は、つねづね「中村久子の内面的な、心の歩みは、へ人間でありたい、あり続けたい」ということから始まっている。<sup>(8)</sup>ということ語っておられる。

幼い日、久子はまず一人で食事が出来るようにとしつけられ、誰の手も借りずに口で直接食べられるようになった。しかし、「手を使わずに食事するのは、犬や猫と同じだ」と周囲からかわれ、「自分は人間なのだ。箸を使

って食事をしたい」と強く思い、努力と工夫の結果、切断した腕の末端に巻かれた包帯に箸を挟み、食事ができるようになった。この姿を見て母は久子にはどきものや裁縫など日常の仕事を自分一人で出来るように、次々と厳しくつけていく。負けん気の強かった久子も、母の願いと徹底的なしつけに応え、血のにじむような努力を重ねた。こうして、久子はまさに「人間として生きるために」超人的な努力によって、奇跡ともいうべき成果を次々とあげていく。

しかし、「歎異抄」と邂逅してからの久子の中では、明らかな「人生の方向転換」があったと思われる。ここで久子は今までの自分の生き方そのものを見つめ直し、その上で再び「人間でありたい、あり続けたい」という願いを心の深奥から願っていた。

その願いを最後に成就するものが「念仏のおしえ(浄土真宗)」であり、久子はその生涯をもって真宗に出会い、「真宗の宿業観」を顕証していく、その歩みこそが「人間が真の人間となるための歩み」に他ならないのだと思う。

そして、やがてその願いは、「中村久子」という四肢切断の一女性を通して、すべてのひとの願いとなっていく。

### 「真宗の宿業観」

では、久子がその生涯をもって顕証した「真宗の宿業観」とは、どのようなものであろうか。

廣瀬果氏は、その著『親鸞のおしえ』の中でこう述べられている。

宿業は一応過去の生活というでもいい。然し何もそれによって遠い昔の生活とか、前世の生というようなことを考える必要はない。むしろ私の現在を成立たしめている必然性に目を開くことでしよう。現在に目を開く足下

に、現在かくあるという事実は承知のできない事実ではなくて、かくあるべくしてあったのだということにほんとうに領けたということが、宿業を知ったということでないかと思うのであります。だから宿業ということと運命論とは全く違うのです。運命論というのは、現在こうあるということの必然性は私には承知ができない、わからないというかたちであります。にもかかわらずしかたがないから諦めよう。ところが宿業というのはそうでなくして、私の身が置かれておる現在を成り立たしめている必然的な理由というものが、現在の私まで私を育ててきた過去のすべての生活というものに、ほんとうに納得がいくというのが宿業感なのです。運命論と全く違うものであります。それはいたずらにかなたに願いをかけてゆく私が如来の願いといわれるような本願に呼び覚まされると同時に、ほんとうに夢から覚めて、現在の私というものに目が開くと同時に、そこに一切の過去の行為というものが私を現在まで育ててきたものとして意味を持つてくるのです。<sup>(9)</sup>

次に紹介する、久子の詩にはそうした「真宗の宿業観」を体現した境地が歌われているように思う。

はからおうとしても

何ひとつ自分の力で

はからうことをようしない私

はからえないままに 生かされている私

怒りのままに

腹立ちのままに

かなしみのままに

与えられないままに

足らないままに

生かされているこのひととき

手足の無いままに生かされておる

真理の鏡によつて 自分の

心のとびらを そうつと開いて のぞく

そこにはきたない おぞましい

自己がある――

そして きょうも無限のきわまりない

大宇宙に 四肢無き身が

いだかれて 生かされている――

ああこの歓喜 この幸福を

「魂」を持つておられる誰もが共に

見出してほしい

念願一杯あるのみ<sup>(10)</sup>

## 「運命論的宿業観」との対決

それにもかかわらず、「宿業」という言葉の響きのなかに、一般的には暗い運命論を感じ取る人が多いことは、今もって否めない事実である。

しかし、中村久子はそうした「運命論的宿業観」と、徹底的に対峙する姿勢を見せたのである。

「あんた、まア可哀相に手も足もないんじゃないア、前世の業じゃでなア、この世は業はたしじゃで、しんぼうしんさいなア」「この世で手も足もないなんてことは、あんたに何かたたっているんじゃないやぜなア、ただだから業だと思つてあきらめるんじゃないやぜな、あきらめんさいなア」物心つく頃から今日までにこうした言葉は耳にたこのでさるほど、あらゆる人たちから聞かれました。

### (中略)

何々教団の、しかも宗教家として立派な堂々たる肩書き、地位を有しておられるある布教師が、身体障害者連中へ御講話の中に例の前世の業が現れて——云々などというのを聞くと情けなくなります。その中の障害者の一人が私に、仏教とは親しみ難いもの、と言われたことがあります。いかなる立派な地位や肩書きやバックがあつても、あなたは前世の業だから、と高い所から言い放つことは、他宗は知らず、親鸞様のみ教えからは決してこんな思い上がったことは言われないのではないでしょうか。無学なために、もちろん、真宗の高い深い教学を全然存じません。けれどもあきらめよと言われて、手足の無い自分をすなおに、ハイ、そうですか、とあきらめ切れるものか切れないものか、まずおえらい方々から手足を切つて体験を味わつて頂いたら——と私は思います。その悲しさと苦しみはどれほどのものか——。六〇年を手足無くして過ごした私ですが、決してあきらめ切つて

いるのではございません。あきらめきれぬ自分の宿業の深さを、慈光に照らして頂き、お念仏によってどうにもならぬ「自分」をみせて頂くのみのです。過去における仏教、すべてのことを善処して行くことでなく、ただ頭から、因縁だから業だから、あきらめねばとの一方的なこの觀念が、仏教を知ると知らざるによらず、社会の人々に沁みこんだことは悲しいかな、「死物」にひとしい今日の仏教に追い込んでしまったゆえんと申し上げたら過言でございましょうか<sup>(11)</sup>

「前世の宿業だからあきらめなさい」といった説法が、苦難の現実を生きざるを得ない人間にとって、納得できるものである筈がない。悲しみにうちひしがれている人に、高いところから「そのままの救い」と言って通用するものであろうか。

ここにおいて明らかになったことは、苦難の現実に直面している人に対し、宿命としてあきらめて「そのままの救い」と辛抱し、眼をつむる方向での、暗い運命論としての宿業観が、他ならぬ真宗僧侶の「説教」の中にも存在したという事実である。

個々の人間存在が等しく抱いているであろう「現実への不満」については、多くの場合、具体的な因果関係が判然としていない。そういう漠然とした不満に対して、「運命論的宿業観」が説かれた時、人はそれを不合理と感じながらも、反論する拠り所を見い出せない。

しかし、苦難の現実を受け止めて生きていこうとしている久子たち身体障害者を前にして、なお宿命論としての宿業観を展開することは、反ってそれを説く側の虚偽や非人間性を露呈することに他ならない。

「六〇年を手足無くして過した私ですが、決してあきらめ切っているのではございません。あきらめきれぬ自分の宿業の深さを、慈光に照らして頂き、お念仏によってどうにもならぬ「自分」をみせて頂くのみのです。」と語

る久子の声からは、そうした不合理な宿命論に対する身をもつての抗いと、真の宗教を必要としている人の魂の叫びが感じられるのである。

私たちは現実から眼をそらしてはならない。問題はそうした現実を直視した上で、「宿業」をどう了解していくかという一点にかかってくるのである。

そして、中村久子はその生涯を通じて「運命論的宿業観」と対決し、親鸞によって開示せられた「真宗の宿業観」を顕証していった人なのである。

### 「現在」における幸福の成就

以下、私見を述べる。

われわれ人間は「現在」を生きる存在である。従って、そういう存在であるわれわれにとつての「幸福」なるものも、やはり「現在」において成就されるものでなくてはならない。

人は、「未来に向かって幸福を求め続けていく」と言うが、その言葉の背後には、「現在」における幸福というものが、これまで成就されることがなかったという事実が存する。

人類の歴史に参加してきた数多の人々は、そういう空虚な「未来での幸福」を夢想して、「現在」における幸福を知ることなくして時の彼方へと去っていったのである。

われわれが、「未来へ幸福を求め続ける」ということの背後には、「現在」に対する、あるいは現在における「現実」に対する、どうしようもない不満がある。自分の思い描いている「理想」と「現実」との落差にわれわれは耐えることができない。そればかりか、そうした現実を成立させた「過去」というものに対してまでも、怨嗟の声を投げかけずにはいられないのである。



『観無量寿經』における「我、宿何の罪ありてか、この惡子を生ずる」という韋提希の叫びは、まさにそうした事實を象徴したものと言うことができる。

しかし、どのような現実であろうとも、われわれは「現在」においてしか生きることはできない。生きることを許されないのである。

「未来」へ逃避することもできなければ、「過去」を怨嗟し、それに責任を押しつけることもできない。それは、真の意味で「生きること」にはならないからである。

真の意味での「生きる」ことは、前述のように、「現在」において幸福を成就すること、すなわち「生きている」ことそのことに喜びを見いだすところにしかないのである。

そして、ここにおいてこそ、親鸞のいう「宿業」の深い意味が、われわれの現前に開示せられるのである。

われわれは、この「宿業」の持つ意味を正しく了解することによってこそ、「真実の自己」に目覚めることができるはずである。そして、そのことによって、身の事実そのまま「現在」を生きることができるのである。そこにおのずから「生きる」ことが喜びとなってくるのである。

「真宗の宿業観」とは、そうして開かれてきた、人間に宿る普遍性をわれわれの内に開示してくれる人間観であり、釈尊によって明らかにされた「因縁所生の道理」にわれわれを立ち返らせてくれるものに他ならない。

「よきこころのおこるも、宿善のもよほすゆえなり、惡事のおもはせらるるも、惡業のはからふゆえなり。――

故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとるべしとさふらいき」(『歎異抄』第十三章)

『歎異抄』の、仰せにもありますように、どんなことも宿業によらぬものはありませぬゆえに、宿業を通して

み仏から給われました、お慈悲の、お念仏をさせて頂きたいと思います。<sup>(12)</sup>

久子の障害は決して久子の罪ではなかった。しかし、そのことは父を苦しめ、新興宗教に走らせたあげく早世させるといふ結果を招いた。また母を悲しませ、生活のために弟を手放して再婚せざるを得ないという苦勞に追い込んだ。母の文字通り「鬼手仏心」の如き養育も、深い愛情が裏にあったこととは言いながら、久子の「障害という事実」によって生じたことは間違いない。

自分が受けてきた数々の「差別」についても、久子は内省を重ねる。

被害者であるはずの自分をよく見つめてみれば、両手両足がないことによって、「人に罪を犯させ、差別をさせるような存在」としての自分がある。ここにいたって、久子は自らの中に親鸞のいう「悪人」の姿を自覚した。

『歎異抄』の親鸞は、そうした「悪人としての自分」に直接呼びかけ「身の事実」に目覚めさせてくれたのである。

それまでの久子は、どんな苦しみにも負けない自分を前面に出して、文字通り超人的な努力を重ね、成果を挙げた。だが、それは視点を変えれば、「頑張ってきた、私が高みに立ち、正義に立っている」<sup>(13)</sup>ということであり、頑張っても頑張っても、その「自力のはからい」から生じる悲しみや苦しみはいつまでも消えなかった。

『歎異抄』から「罪業の身」を自覚させられた久子は、「両手両足がないという自分の存在のすべて」を引き受けていく覚悟ができた。

ほんとうの善知識は、先生たちではなく、それは私の体、「手足がないことが善知識」だったので。悩みを、苦しみを、悲しみを宿業を通してお念仏させて、よろこびに、感謝にかえさせて頂くことが、先生たちを通

してきかせていただいた正法。親鸞聖人さまのみ教えの「たまもの」と思わせて頂きます。<sup>(14)</sup>

ここにいたって、久子の目の前に心から安心できる、広い世界が開けたのである。

次にあげる「ある ある ある」という詩こそは、その「久子が出遇った世界」を最も端的に示している代表作であらう。

ある ある ある

さわやかな

秋の朝

「タオル とつてちようだい」

「おーい」と答える

良人がある

「ハロー」という

娘がおる

歯をみがく

義齒の取り外し

かおを洗う

短いけれど

指のない

まるい

つよい手が

何でもしてくれる

断端<sup>だんたん</sup>に骨のない

やわらかい腕もある

何でもしてくれる

短い手もある

ある ある ある

みんなある

さわやかな

秋の朝<sup>(註)</sup>

中村久子女史顕彰会会長の三島多聞師は、

私たちは「ない、ない、ない」と久子さんを見るけど、両手両足のない久子さんは「ある、ある、ある」と言う。久子さんは両手足ないままに、完全な人間として自分はここにある。ないない不足の人間として生きていない。

久子さんを見るには、いろいろな見方があるんでしようけれども、私たちが久子さんから学ばねばならないのは、両手両足を切ることでない。たとえ両手両足がなくても、なお喜びとしてそれを引き受けて生きていかれた、その助かり方を学んでいかなきゃなんと思うんですね。そこを間違うと、久子さんは立派な雲の上の人、私たちと関係のない人になってしまいます。

久子さんには逃げ場を持たない人間の凄味がある。久子さんはよく、私のまねをしてくれというのではないんだと言っていました。両手両足がない者にして、かく喜んでおれる世界がある、私の見つけた世界を皆さんにも知ってほしいと、こういうわけですね。しかし久子さんは、両手両足がないことはいかに苦しいことであるかということも、同時に言っておられる。したがって、両手両足がないことがありがたいですと言ったのは、まったく相反する言葉、世界です。ということは、苦悩を捨ててではなく、受けて立ったところに初めて出る幸せですから、この幸せは苦悩のあるかぎり絶対になくならない。この身に障害があるかぎり、この幸せは保証され<sup>(16)</sup>たもんであるという、その凄味には舌を卷きます。

と語っている。

中村久子の信仰の中身に光りを当てていく作業は、今後もさらに貴重な資料（絶版の著書や日記・メモ等）を読み解いたり、有縁の方々の証言をたどるなどの地道な研究活動の中で行われていくべきであろう。

筆者が現時点で言えることは、久子の信仰の根本にある「宿業観」が、従来の運命論的なものではなく、親鸞の教

えを自己の「障害という身の事実」を機縁として明らかにしていった、「開かれた境地」こそ、「人間を真の人間たらしめるもの」を指していることは間違いない、ということである。

それは文章や講演録以上に、久子の才能が豊かに発揮されていると思われる詩歌の作品に、より顕著な形で示されているように思われる。

平成十四年、真宗大谷派の「報恩譚パンフレット」巻頭に、中村久子女史顕彰会会長の三島多聞師が「ご恩―中村久子・無手足の感恩」という一文を寄稿しておられる。その中に久子が昭和三十六年（一九六一年）宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌法要に当たり作った歌が掲載されているので、この項の終わりにあたって紹介しておきたい。

【親鸞さまをお慕いして】

手足を切断して 十四年の間

苦痛と貧苦の谷間におちて

いのちのともし灯は

かそけくもゆれていた

このともし灯を消してはならじ

と、あらしの昼も 雨の夜も

守りつづけて 育てて下さったのは

今は亡き

大恩ある 父と母のおかげさま

南無阿弥陀仏をとふれば

この世の利益きわもなし

流転輪廻のつみきえて

定業中じようごうちゆうぎょう天のぞこりぬ

と、おしえ下さったのは

親鸞さま、あなたで御座いました

うつし身の手足の無い

苦しみと悲しみを

最上のえんとして

極重悪人の私を

お救い下さった 歓喜の世界に――

光りかがやく この地上に――

おお 何たる素晴らしさでしょう

真実の仏法のみ教えをきかせて頂き

この大きな幸福を 下さったのは

親鸞さま あなたで御座いました

生きがたくして 生かされている

このしあわせ

遇いがたくして 遇わせて頂く

この大遠忌

ききがたき正法を きかせて下さった

親鸞さま——けふも お念仏の裡に

お慕い申させていただきます

ほんとうに ほんとうに

有りがとう 有がとう御座いました

南無阿弥陀仏<sup>(17)</sup>

#### 4. 念仏者・中村久子——讃仰と批判のあいだ——

(極楽を願うところは更になしただらけしきは弥陀の名号

久子)

#### 『こころの手足』刊行と中村久子顕彰活動の危機

久子没後から四年後の一九七二年(昭和四七年)、瀬上敏雄氏<sup>せがみとしお</sup>編集による『こころの手足』が刊行された。これは久子の既刊著書を新編集したものであり、以後現在に至るまで版を重ね、久子の「自伝」として最も世間に流布している。



一九七四年（昭和四九年）、久子の生前からその活動を支援し、没後もその顕彰に取り組んできた「久光会」の三島常馨会長が逝去し、「久光会」はほとんど活動を停止する状況となった。

ここにおいて「中村久子を世に問う」仕事は、危機的状況を迎えていた。久子の存在が決して世に忘れられたわけではなかったが、彼女が七二年間の生涯を通じてわれわれの前に示した、「人間の真実の生き方」を見つめ直し、問い直すための機が熟していなかったたのであろう。

もっとも例外として、本願寺派教証寺住職、小池俊文師による映像作品（アニメと実写の併用）「ある ある ある」の制作（昭和五二年）や、西羅府仏教界頼母子講による「無碍の道」（中村久子著・藤村文雄編）の出版（昭和五六年）があり、有縁の人々の間で、久子は「へかけがえのない存在」として語り継がれていったのも事実である。（両者ともに本願寺派から出てきた動きであることに注目したい。）

しかし、これ以外の宗門関係者、教育関係者からの具体的な発言や取り組みは顕著には見られず、「久子復興」の大きなうねりにはつながらないうちに、時間が経過していった。

### 『浄摩尼珠——花びらの一片——』と三島多聞師の願い

そんな中、一九八二年（昭和五七年）に、三島常馨師のご子息で、久子の手次寺真蓮寺住職の三島多聞師により、『浄摩尼珠——花びらの一片——』という書物が出版された。

これは、前年の国際障害者年にちなんで、かねて念願にしていた中村久子の特集を真蓮寺寺報『浄摩尼珠』に顕彰したいという思いから生まれたものであったが、さらに言えば「久光会」の現況を憂い、久子顕彰の取り組みを新たに出発させたい、という願いに基づくものであった。

これは、中村久子の自叙伝の抜粋であり、詩集であり、アルバムであり、一部講演録も含まれているが、編者の論

評は加えられていない。久子のあるがままを紹介することが、彼女の真実の姿を正しく世に知らしめることができる、との信念からであろう。

三島氏は、「後記」で次のように語っておられる。

私が小さい時、久子女史が当寺へ来られた折、女史の腕の断末のところをさわらしてもらった記憶がある。それは丸くて(ちょうどテルテル坊主の頭の様な)、やわらかくて、暖かくて、ピンク色をしていた。その腕が厳しい人生を切り開いて来られた腕であることには間違いないのに、なぜあんなにやわらかかったのか、このたび女史を尋ねたあと、にわかに昔の感触が思い出された。<sup>(18)</sup>

この「浄摩尼珠——花びらの一片——」の出版によって、「中村久子復興」の機運が次第に醸成されていくことになる。

### 「中村久子の生涯——四肢切断の一生——」と黒瀬昇次郎氏の奮闘

まず、一九八五年(昭和六〇年)NHK教育テレビの「このころの時代」に三島多聞師が出演し、初めてテレビの全国放送において「中村久子の生涯とその意義」を紹介する機会を得た。(以後「このころの時代」では、繰り返し「中村久子特集」を取り上げることになる。)

この放送を見ていた一人に黒瀬昇次郎氏<sup>(くろせしやうじろう)</sup>があった。

見終えたあとの驚きは大変なものであった。まさに、

へただごとならぬ人がいる

という一語につきた。

(中略)

三島師の編集になる「浄摩尼珠」の一冊はすぐにとどいた。待ち構えていた筆者はそれを読み終えたとき、大袈裟な表現だが、その女性の生き方のすさまじさに呆然としていた。<sup>(19)</sup>

久子の生き方に深い感動を覚えた黒瀬氏は、その生涯を忠実な記録にまとめようと決意する。

こうして一九八九年(平成元年)、『中村久子の生涯——四肢切断の一生——』が、氏の自費出版により上梓(春秋社)された。

中村久子の無手足の体で受けとめた人間の生き方は、そんなそこらの殿堂伽藍にころがっている、やわな教理のものではない。

人間としてどう生きるかということとその体で必死に追いつめた、現代のすさまじい求道者の感じがする。

久子は思想的にもだえ苦しんだあと、親鸞の思想にたどりついた。そしてその教えに、動ずることのない境地(安心)を得た。久子は親鸞の生き方をその手に享けたのである。

彼女の宗教的な思想は別として、その生きかたには、現代のわれわれ健常者が謙虚に学ぶべき数多くのものがある。その学ぶべきものを記録してみよう、という筆者の気持ちだが、この書を著す動機になった。

本書は単なるノンフィクションの伝記ではない。世にも悲惨な半生を送った女性が、その業苦にめげることなく、

「人間の真の生き方というものとは何か」

という探求心に目覚め、血みどろの苦闘をしたあと、やがてそれを完成していく過程を克明にえがいたものである。

最初、この世の、最大の不幸を背負った女性が、最後にはこの世の最大の幸福をつかみ、当時の人々に敬仰される身になった。

(この人間の生き方は何か)

というものを追いつめたのが本書である。

最初は上梓してくれる出版社が一社もなく、久子と交流があり「このころの手足」の編集にも携わった瀬上敏雄氏の奔走でようやく出版にこぎつけたものであったという。(その後、平成六年に致知出版社から再出版される。) また、執筆中に「急性リンパ性白血病」と診断された黒瀬氏が病をおして、まさに心血を注いで奮闘し、完成させた労作であった。

こうして、三島師、瀬上氏、黒瀬氏らの尽力で「久子復興」の輪はさらに広がりを見せることとなる。

### 久子復興

その機運に拍車をかけ、世間に中村久子の存在を知らしめるのに決定的な影響力があったのは、何といっても一九九二年(平成四年)に、当時日本テレビ系の人気番組であった「知ってるつもり!」が、前記黒瀬氏の著書を原作に「中村久子」を取り上げ、全国放映で紹介してからである。これは、毎回歴史上(または現在活躍中)の人物の事跡や功績、評価について、興味深く再構成して紹介する番組であったが、三〇〇回を超える放映の中で最も反響が大き

かったのが、「中村久子」であったと聞く。民放TVのゴールデンタイム枠での影響力は大きく、これを機会に久子の自伝「こころの手足」や複数の伝記も版を重ね、「日本のヘレン・ケラー」として、久子の名前は全国に知られるようになっていく。(もちろん、その陰には三島師を中心とする地道な顕彰活動と、瀬上氏や黒瀬氏をはじめとする研究者の献身的な努力があったことは否めない。)

この前後に出版された「伝記・研究書・関連図書」としては、

『四肢切斷・中村久子先生の一生』(黒瀬昇次郎著)〈平成五年：致知出版社〉

(前述の著書とは別に小中学生を対象にした講演録)

『手足なくとも 中村久子の一生』(山田紘一著)〈平成七年：東京書籍〉

『沙羅の花——中村久子女史賛歌集——』(金家多美枝著)〈平成八年：中村久子女史顕彰会〉

『中村久子の一生』(瀬上敏雄著)〈平成九年：春秋社〉

『わが母・中村久子』(中村富子著)〈平成一〇年：春秋社〉

といったものがあつた。

また、「放送・映像・音声作品」としては、

『ある、ある、ある』〈平成元年：岐阜県吉城郡国府町有線テレビ制作〉

(前述の同名作品とは全く別のもの)

『生きる力を求めて——中村久子の生涯——』(ビデオ作品) 中村久子女史顕彰会

『私の越えて来た道』(中村久子講演テープ) 中村久子女史顕彰会

といったものが挙げられる。

(なおNHK教育、日本テレビ系では前述のものを、再構成するなどした同種の番組を再三制作の上、放映している)

また、こうした中で、一九九三年(平成五年)、以前の〈久光会〉を発展させた「中村久子女史顕彰会」(会長:三島多聞師)が、高山市真蓮寺内に設立され、「郷土が生んだ、世界に通ずる女性、中村久子を後世まで顕彰することによって、日本の心や生き方を世界に伝えていこう」という願いの下に活動を開始することになる。

文字通り「中村久子再発見」の時が到来したのである。

これらのメディアや書物を通じて久子を知った人たちは、苦難に出会いながら、その事実を身に引き受けて、女性として、母として、そして何よりも一人の人間として七二年の人生を生きぬいたその生涯から無条件の感動とともに、「生きる力」を与えられていったと思われる。

#### 久子再発見の中で……

しかし、ここに問題点がある。

それは、久子が「苦難に負けずに生きた人」という偉人伝的側面で語られることのみの多さと共に、ともすれば「中村久子は真の念仏者と言えるのか?」という疑問が、殊に宗門関係者の間で交わされていくことであった。

筆者はある宗門関係の教育者との雑談の中で、談たまたま中村久子に及んだとき、「中村久子さんを学生や中高生達に紹介しても、結局『風の旅』の星野富弘さんや、『五体不満足』の乙武洋匡さんと同じように、苦難を克服した人、障害に負けずに頑張っている人というレベルでの理解になってしまい、(障害のある人も頑張っているのだから、私達も負けずに頑張らなくてはいけないな)といったとらえ方で終わってしまうだろう。」という発言を聞いたことがある。(星野、乙武両氏について、ここで述べる紙数はないが、この両氏についても、こうした括り方が必ずしも当を得ているとは思えない。)

また、ある宗門関係者と話していた折には、「中村久子さんの偉大さは認めるが、彼女は果たして真の念仏者と言

えるのか？」と言う問いが発せられたこともある。

前者の発言については、本稿の前項でその答えの一端となるものを提示したつもりである。

すなわち、中村久子が七二年の生涯を通じて私たちに語りかけてくれた最も重要な課題は、「両手両足の切断という、苦難をのりこえて力強く生きぬいた人」という「偉人伝的側面」にあるのではなく、自分の身をもつてがき苦しみながらも「人間という存在」についての問いを発し、「真宗」に出遇おうとした点にある。更には、救いがたき、迷い多き私たち凡夫の一人として、苦難の現実を離れることなく、そのまっただなかにあつて、仏教を証明する存在となった点にこそあるのだと思う。

それは久子の生きた時間や空間を超えて、直接「現在」<sup>いま</sup>を生きている私たちに呼びかけてくる、根元的・普遍的な声であり、願いの声だ。

黒瀬昇次郎氏は、そうした久子の姿について、

久子は宗教家でもないし、宗教家を志しもしなかった。彼女は一個の人間としていかに生きるかを追求しつづけた女性である。ここまで深いものを求めようとする彼女に、筆者は菩薩(21)法蔵をみた。久子が歎異抄の親鸞に法蔵を見たごとくに、である。

と語っているが、まさに中村久子という存在のかけがえのなさ、この一点にこそある、と言わねばならない。

これについては、この後さらに「中村久子を世に問い顕彰していく」仕事の中で明らかにしていく以外に方法はない。「障害を超えたすばらしい努力」を誤解として否定するのではなく、それを導入としながら、その奥から見えてくる久子の実像と、その願いとするところをできるだけ正しく、多くの人(特に若い世代)に伝えて行くことが大切

ではなからうか。本学園も教育現場にある者として、その役割の一端を担っていきたいと考える。

後者の発言の背景には、久子が真宗関係者以上に、クリスチャンの座古愛子女史ざこあいこ、無我愛の提唱者伊藤証信師いとうしょうしん、禪の山田無文老師等、他宗の関係者と深い交友があったことや、亡き母への思いを形にするために高山国分寺に「悲母觀世音像」を建立したいきさつなどがあると思われる。

久子はまだまだ誤解されている。誤解というより、その生涯の軌跡の断片からしか久子を見ていない人が、宗門関係者にも多く存在するのだ。

そして、宗門外の人である黒瀬氏が、「久子に法蔵の現身うつしを見た」と言い切っておられるのに比して、前記の宗門関係者の疑問を考える時、深い哀しみを感ぜざるを得ない。

ここでは、後者の問い「中村久子は真の念仏者と言えるのか」に対する答えを詳述したい。

#### 既成教団批判とその信仰

瀬上敏雄氏は、

信仰の上でも久子さんは一匹狼であった。久子さんを知らぬ人たちは久子さんを浄土真宗の信者だと決めておられたようであるが、久子さんは決して真宗の信者ではなかった。むしろ真宗寺院の在り方に厳しい批判を持っておられた。「いずれの行もおよびがたき身」であるからといって、本当の「行」を持たぬ僧侶を嫌われた。久子さんの信仰は、宗派を超えて親鸞聖人に直結し、「如来からたまはりたる」念仏に生きたのである。「歎異抄」を座右の書とし、左腕の断端の少し上のところに数珠をはめ、暇さえあれば念仏を唱えられた。位階にも袈裟にも決して頭を下げなかった久子さんは、信仰の上では一切妥協を許されなかった。久子さんを宗教に導かれ



たのは「無我愛」の伊藤証信先生と朝子夫人であるが、その証信先生が戦争中、国粹的な傾向を示されたという理由で、久子さんは「無我苑」を敬遠しておられる。久子さんにとって念仏も、業深き己れのいのちも、「如来からたまはりたるもの」であって、その時その時に、国家や政治や、都合のよいものに結びつくものであってはならなかった。それは見事な厳しさを信仰の上でも示されたのである。<sup>(2)</sup>

と述べている。

そんな久子が、自身の信仰(安心)<sup>あんじん</sup>について明確に語っている言葉を、次に紹介したい。

(前略) 子供を育てる家庭のしつけも戦後はゼロ。そのために非行少年の多いこと、どちらを向いてもお恥かしい。なさけないことは、宗教心の欠けていることだと思います。病氣も災難も貧乏も自分にあたえられたものは、何でも受けてゆくしつかりしたものを、なぜ心の底にもたないのでしょうか。

(中略)

宗教を金もうけや、災難よけや、病氣なおし、ぐらいに考えるとはもつての外と思います。宗教とはいかなる境界にも、どんな体でも生かされている限り、世間にご迷惑をかけないように、正しく強く生きぬいていくこととございます。与えられた境遇を素直にうけて正しく生きる。それが真実の道、宗教の道でございます。

いま一つは、仏教といえば、特にご老人の方は死んでからのことに、考えておられる方もあるようですけれど、死後のことよりも、今日を、否、今の一刹那を、生かされていることを、合掌念仏しなければならぬのでございます。

考えてみますと、昔、父が天理教に入信されて、私の手足の上に利益をいただいておりますたら、きっと後

年は天理教の布教師になっていたと思います。

肉体の上にご利益をいただかなかったことは、私の精神上に、大きな目にみえないもの。金もうけ、災難よけ、病気なおしなどは正しい教えではないこと。を、仏さまは私にお恵み下さいました。

人にはそれぞれの縁がございます故、信仰のはじめは、なやみ、災難よけなどの面からでも結構です。けれどもご利益をいただくことのみを目あてにしないで、もっと深く、広く自分を見ることを求めてほしいと思います。

そして皆で「無碍の道」を歩こうではございませんか。

人間には絶え間のない苦しみがある。夫に先立たれた妻、子に死なれた親、一生身うごきすらも出来ないお気の毒な方もあります。どんな境遇の人でも、その苦しみや、かなしみを、ぐちゃ、不平でおわることなく、それを喜びにかえていただくことが、善知識と思わせていただき、われ一人の助かりでなく、人さまにも喜びをお分けさせていただくでございます。

守りに守られているこの生活に、貧しくとも感謝の生まれてくることは、仏さまよりの大きなおはからいなのです。

両手のある皆さま。しっかりと手を合せて、合掌して下さいませ。

「南無阿弥陀仏」

ここで明らかなように、中村久子はまぎれもない「念仏者」であった。

しかしながら、四肢切断という苦悩を生きてきた身の事実と『歎異抄』の言葉とによって、如来の本願に目覚める者となったのである。

したがって、真宗大谷派門徒の家に生まれ、法要も行い、高山別院で多くの法座に遇い、彼女自身の葬儀も大谷派の儀式で行われながらも、久子自身は生前折に触れ、「私にはこれという宗教はありません」という言葉を口にしてきた。筆者には、この場合の「宗教」とは、「セクトとしての宗派」或いは(狭義の)「家の宗教」という意味合いであるように思われてならない。

一方で久子は、「何の宗教ですか?」と問われると「親鸞聖人様が大好きです」と答えている。このことから「宗教とは人に強要するものではなく、自分一人の安心のためにある」という、久子の堅い信念が感じられる。それゆえ、「何の宗教ですか?」という問いの背後に感じられる、「セクトとしての宗派、家の宗教」を確認すればこと足れりとする風潮を、嫌ったのであろう。

久子は間違いなく「念仏者として生かされている」自覚を持っていたが、それを強く感ずれば感ずるほど、当時の一宗派としての本願寺教団の在り方の中に、久子の了解した「親鸞のおしえ」と相容れないものを感じ、それを「自分の宗教」と言うことを潔しとしなかったのではないだろうか。

一例を挙げれば、前項で引用したように、当時の一般的な法座(説教)で、身体障害者に対して極めて閉塞的な宿業観しか提示し得なかった一部の真宗僧侶や、そうした説教に疑問を持たない人たちを痛烈に批判している。この点で、久子はすでにセクトとしての宗派の枠を超えた視点で考え、行動していたと言える。それは、あたかも「歎異抄」の唯円が、異を歎くことによって、真の親鸞に聞いた真実をあらわすこととなった姿と重なってくるかのようである。

もちろん、久子は大谷派の中にも、かけがえのない先達(善知識)と言いうる存在を何人も見いだしている。

曾我量深、金子大栄、暁烏敏といった存在はもちろん、信心決定の直接的な機縁となった「歎異抄真髓」の大須賀秀道、真宗念仏の教えを教導し、歌道にも導いてくれた、当時の高山別院輪番の藤山治定、久子の手次寺真蓮寺住

職で、久光会(久子顕彰会の前身)会長の三島常馨といった人々である。

又、本願寺派では、やはり教えを受けた牧野専幸をはじめ、京都女子学園(前身)の創設者甲斐和里子、北米開教使藤村文雄、そして松原致遠、足利浄円、梅原真隆、花山信勝といった人たちと直接間接に交流を持った。

しかし、久子は真宗関係者のみならず、クリスチャンの座古愛子、無我愛提唱者伊藤証信、禪の山田無文等とも深い交友を持ったことも周知の事実である。また、晩年亡き母への思いを形にするために高山国分寺に「悲母親世音菩薩像」を建立し、山田無文師を開眼導師として法要を行った事実もある。

### 山田無文師との交流と悲母親世音像建立

座古氏、伊藤氏については既に述べたが、ここで「悲母親世音菩薩像建立」にまつわる、山田無文師との交流に関する、二女富子氏の文章を紹介したい。

仏像の建立ですから、当然開眼供養をしなければなりません。そのときに先ほどの老師(筆者註：無文老師とは別の方)が母に再び苦言を呈されたのです。自分の母親を観音様に祀って、みんなに拝ませるとはなにごとか、思ひ上がりも甚だしい、と。

母の思ひは、さきほど申し上げたように、そんなだいたいそれた願いではありません。母親の心というもの、全ての人の母の心をそこに込めたい、一人一人の母の心を込めたい、そういうことだったのです。非難されても、母は全然、釈明しようとはしませんでした。

私にしてみれば、不当に曲解されているのは悔しい。「母さん、なぜ釈明をしないの」と聞いたたら、「そんなことと必要ない」と。そう思われるなら、それでも結構。人それぞれ、それなりの思いがあるんだから、かまわな

い、と。

母は、どんな場合でも、いつさい釈明ということをしない。かわいそうだなと、その時、私は思ったんです。母ばかり悪者になることはないのという思いでした。

そういう残念なことがありましたときに、山田無文老師が「中村さんは本当にいいことをなさる、わしが碑文を書こう、導師も務めよう」とおっしゃってくださいました。老師の申し出をうかがって、私が「よかったね、お母さん」と喜ぶと、母もうれしそうに、「人それぞれ、人の思いは違う」としみじみとした表情を浮かべていました。

(中略)

無文老師の知遇を得て、母は、禅宗のお坊様の中に、強さばかりでなく、すごく慈愛に満ちた、真宗のいわゆる善知識と言われるような方々、足利浄円先生とか、曾我量深先生とか、金子大栄先生とか、そういう方々の優しさと共通するものを感じ取ったようです。

(中略)

無文老師は、先ほどの老師の話を知っていらっしゃって、それを承知で受けられたのだと思います。詳しい経緯はわかりませんが、先の老師がほうほうで母のことを否定的におっしゃられた。だけど母は、それに対して一言の弁解も釈明もしませんでした。私はそういう点で母はすごく立派だったと思うんです。どんなに罵られ、も、謗られても言い訳をしない人でした。

無文老師はそうした母の弱地をお察しになって、かばってくださいだったような気がするんです。<sup>(24)</sup>

ここで、無文師と久子は「禅」や「念仏」という立場を超えて、まさに仏者としての立場から「心の交流」を果た

している。

座古愛子も、伊藤証信も、そして山田無文も、最終的に宗教・宗派を異にすることがあったとしても、久子にとつては「心通ずる」かけがえのないへよき人々であった。そこにも久子の「宗教観」があるように思う。

「中村さんは何の宗教ですか。」

「私は真宗の親鸞聖人様が好きです。人間として一切の苦難を通して下さいました聖人様がたまに尊敬できます。しかし自分が好きだからと言って宗教は人に強いるものではないと思います。

キリスト教でもよいし、禅宗でもよいし何宗でも結構と思います。しかしほんとうの宗教を求めてほしいと思います。私の地方でも非常に迷信が多いのですが、神仏は病気を治して下さいるものではありません。また神仏に、自分の手足を元々通りに治して下さい、と祈ることが決して宗教ではございません。何者にもすがらない“安心”の境地の到達点が真の宗教です。

宗教とは肉体を超えた、我利我欲も出来るだけ取りすてて仏にすべてを委ねる魂の奥深い境地だと思っています。<sup>(25)</sup>

その意味では「悲母観世音像」の建立も、久子の心の深奥の「やむにやまれぬ願い」から生じた必然と見るべきであらう。

筆者には、この「悲母観世音像建立」にこめられた久子の願いが、久子も敬慕した念仏者、暁烏敏の

十億の人に十億の母あらむも 我が母にまさる母ありなむや

の一首にこめられた母への思いと重ねあわさってならない。それはまた、久子や暁鳥を通じて、私たち一人ひとりの「親との出遇いの極み」を象徴するものになっているのではないだろうか。

今日の真宗教団の教義に照らして、久子の「悲母観世音像建立」の件を批判することはたやすい。しかし、その一点をもって「中村久子は純粹な真宗の信仰は持っていなかった」と言い切れるのであろうか。悪しき意味での真宗教条主義のにおいを感じざるを得ない。

むしろ、真宗教団が近代以後、国家神道の足かせに加え、宗教雑居の中で「親鸞に帰れ」という言葉に象徴されるように、真宗の真髓を見失わぬために、(久子に代表される)こうした宗教観を切り捨てていかざるを得なかった事情がその裡にあったように思われる。

このことは、久子が前記の「運命論的宿業観」について一部の真宗僧侶を厳しく批判する中、「私は真宗の門徒です」と明言することに抵抗を覚えるようになっていった事実と相俟って、今日の私たちに大きな課題を提示しているように思われてならない。

この件について、これ以上の私見を述べることは、現在の筆者の力を超えるように思われるが、少なくともこれらの諸点に関して、宗門に属する人間として、ある種の「心の痛み」を覚えるのは事実である。

久子の姿勢を単に批判し、是非を問うだけでなく、このことを機縁に、宗門としてもこうした事実について内省を重ね検証していく中で、多くの人々に「信仰についての正しい理解」の進むことを心より願うものである。

## 5. おわりに——願いとして——

(手足なき身にしあれども生かざるいまのいのちはたふとかりけり 久子)

本稿の終わりに当たって、『障害者として』『妻として母として』という二点も含めて、本学園の在り方と「中村久子の世界」との関わりについて、若干の愚考を述べたい。

### 人間の尊厳を実現する願い——障害者福祉の課題——

明治・大正・昭和前期という、まだ人権意識が未成熟であった時代を生き抜き、一人の人間として、精神的、経済的に強く自立を願った中村久子は、障害者福祉の向上に力を尽くした。

久子は、「障害者は世間様に甘えてはいけない。社会福祉は有り難く受けるべきだが、自分の力でパンを口にする喜びを知らない<sup>(26)</sup>。」と言った。その強烈な思想は、一部の人々の反感と批判を生み、傲慢、不遜、売名行為の人とも呼ばれた。

だが、彼女は障害者に人間としての誇りを失うまいと訴えた。いのちの真実に目覚めて生きる障害者こそ尊き人である、と主張し、福祉を受け取る際にも、その「尊いいのちを生きる者」としての自覚の上に受け取る姿勢を願ったのである。

何十万の障害者の中には、福祉法を足場にして、国や政府に、年金を申請されて、今年中にもお金を受けられるようになられたことは、困る方々や、病めるお友達が助かることなので、結構ではあります。が、毎月二千



円、三千円のお金で満足して救われて、生きて行けるのでしょうか？

私は否、と申したい。

元来人間というものは欲のかたまりなのですから、二、三年後にはもっと多くの金を要求するようになるでしょう。こうして数十年後には、一体、国の経済はどんなになって行くことでしょう。

その上、障害者は物心両面に、果たして救われてゆくのでしょうか？

(中 略)

何十万人の障害者の全部が、お金をいただくことばかりを願っておるではありません。ほとんどの障害者が“働ける場所”を望んでおられることを、社会と政府のおえらい方に、もっとわかっていただきたい。他人の事だと考えないで、生きる場所を作って下さいませ。

(中 略)

いまひとつは、障害者のおたがいも、社会や家庭ひいては国家や政府にあまりたよりすぎないことにしたいと思います。人間は生きているのではなくて、“生かされている”のですから、懸命に努力することが必要なのです。ひとが国からお金を貰うから、わたしも貰わなければ損だ、という、つまり乞食根性をなくしてしまわぬ限り、いつまで経っても自分というものは救われないのでございます。

今こそ心の眼をしつかり明けて、おたがい力になりあい、社会の人たちの指標になる人間になることを、一人一人心掛けて、障害者同士が、明るく正しく生き抜こうではございませんか。<sup>(27)</sup>

法的・制度的に整備がなされ、障害者福祉も向上したと思われる現代であるが、今日の人権教育や社会福祉の抱えている課題を見つめる時、解決しなければならない本質的な問題は、今も何ら変わっていないように思う。その意味

で、私たちは久子の「心からの叫び」に込められている「人間の尊厳を実現する願い」に、耳を傾けていかなければならないのではないだろうか。

女性の真実を実現する願い——「女人成仏」の意義——

『仏説観無量寿經』は仏陀によって、悩める一女性のために説かれたものである。人間は人間そのものとして出生するのではなく、男性もしくは女性という半面の存在をもつてしか生きえない。男女の性差に目覚めることは、その相対する性への尊重なくしてはあり得ず、そのとき我々ははじめて性差を超えた人間そのものとなることができるのである。

すなわち光華女子学園は、女性の真実を実現することを目標として存在する。<sup>(28)</sup>

筆者は前項において、中村久子をその悩める一女性、「韋提希」の問いを自らの問いとした人と記述した。

「韋提希」も「中村久子」も、自らの存在の全てをかけて「自己とは何か？」という問いを発し、真実に出遇った女性である。

あえて誤解をおそれずに言えば、ここにこそ「女人成仏」という言葉の真義をひもとく鍵があるのかもしれない。韋提希は「王舎城の悲劇」を通じて「仏」に出遇い、救われていった人である。そして、彼女は実の息子による幽閉のため死を迎える夫頻婆娑羅や、その逆害の張本人である息子阿闍世の救いをも心から願う者となったのではなかったか。つまり、「自分に有縁の存在」、さらには「全ての存在」が救われない限りは自身の救いもないと願う者となつたのである。

中村久子も、そうした願いに生きた人に思われてならない。

四肢切断のわが身を憐れみつつ早世した父、心を鬼にして厳しい躰を課し、人として生きる道を開いてくれた母、慈愛をもって支えてくれた祖母、生涯に出会った四人の夫、三人の娘たちなど「自分に有縁の存在」への思いは強い人だったと思う。

そして、信心が決定してからの久子は、三度目の夫のように信賴關係が結ばず、自分を苦しめてきた人物でさえ、自分を生かしてくれた存在と感ずるようになり、「自分だけでなく、すべての人が苦しみや悲しみを喜びの生にかえて生きること」を心から願うようになっていく。

真宗の「女人成仏」という言葉にも、いろいろ議論の対象にしなければならない要素(「五障」「変成男子」等)があり、ここではその紙数がないが、要は「男性に比べて女性は成仏しにくい」という表現が、かねてから女性蔑視の問題に抵触し、親鸞の思想的限界ととらえる見解もあった。

しかし、見方を変えれば、これは女人という「すべてを包み込むとする性」が、自分のみの成仏ではとうてい満足できず、すべての人が救われなければ、私も救われないという、まさに「菩薩のいのち」を生きんと願うことから生じてくる問題ではなかったか。

それを「中村久子」の人生に重ねて思う時、「女人成仏」という言葉を前述の問題点に則して否定的にとらえるのではなく、むしろ「女性の真実を実現する」という積極的、肯定的な意味をもってとらえるのは誤りであろうか。本稿のような直感的、主情的な記述のみでなく、資料、文献の裏付けによる研究を、今後の課題としたいところである。

いずれにしても、社会の偏見や自己自身の在り方と厳しく対峙し、人間の真実を求め続けながらも、一人の女性としての幸せもしっかり見据え、子育てを全うしていく久子の姿の上には、女性が本来豊かに備えている明るさ、あたたかさ、たくましさ<sup>が</sup>顕著にあらわれている。こうした久子の生き方こそは、前述の光華女子学園の目標「女性の真

実を実現すること」の具体的な姿ととらえることができるであろう。

光華女子学園の願い——「真実心」と「事業と修行」——

久子の葬儀に際し、久光会会長、三島常馨師は、山田無文老師の言葉を引いて弔辞を述べた。

母なるかな、母なるかなの語が腹に響くように聞かれました。語が具象化するとこんなにまで感動するものか、と今なお忘れることができません。人生の真実とは、

「母なるかな、母なるかな」

の一語に尽きるではありませんか。

あなたの一生も母なるが故に生き、母なるが故に苦しみ、母なるが故に如来の真実心を頂かれたのではないでしょう<sup>(30)</sup>か

ここに奇しくもあらわれたのは、まさに本学園の校訓(学園訓)であるところの、「真実心」である。

我々が真実心を拠所として生きるとは自己を超えた仏の透徹した眼につねに問いかけ、自我に偏しがちな現実生活をたゆまず浄化して行くことを意味するのである。

(中略)

教育はつねに宗教と相俟って真実の人格を作り、宗教は教育によってのみその真実を伝えうるとすれば、本学園はまさにその教育の宗教的側面を主眼とする。ここに学ぶ人格は、自己に対しては自らを律し、他に対しては

深い慈愛の心を育み、共に相和して永遠の世界をめざすものとなる。<sup>(31)</sup>

では、本学園が願う「永遠の世界」とは、如何なるものであろうか。

それは当然ながら、本学園の建物に、多くの人々が集うという、「組織としての繁栄を願う」ことのみを、指しているのではあるまい。

「光華」とは、阿弥陀仏の浄土を讃美する表現である。したがって、この学園に集う私達の共通の願いは、「南無阿弥陀仏」の発見、言い換えれば「自分を生かし、支えてくれている、限りなきいのち」の自覚(めざめ)による自己の発見に他ならない。それこそが、「生かされて生きる世界」すなわち「浄土」の発見を、意味するのであろう。

中村久子が私淑していた金子大栄師<sup>かねこだいえい</sup>に、次の言葉がある。

「事業と修行とは、明らかに区別されねばならない。事業とは外他<sup>がいた</sup>に向かって働きかけるものであり、修行はそれによって自身を形成していくものである。それゆえに、例えば、親が子を育てることは事業であり、それによって親自身を育てることは修行である。教師が生徒を教えるは事業であり、それによって教師自身を育てるは修行である。したがって、事業の縁なしには修行は無縁だということになる。」<sup>(32)</sup>

人間はこの世に生まれた以上、何かをしなければ生きていけない。

それはすべて「事業」ということなのだが、その事業を通して自分が何を学んでいくかということこそが大切で、これが金子師の言われる「修行」の世界である。

我々が中村久子の七二年の生涯から学び、教育活動の中で実践していかなければならない点も、正にここにあるのではないか。

久子は「生きるための苦闘」を通じて「生かされる世界」に目覚め、その生涯を通じて、「真の人間となるための

歩み」を歩み続けた。

それは教師や生徒のみならず、すべての人が「教え育てる」だけの世界ではなく、同時に「教えられ、育てられる」という世界を生きていくということではないだろうか。自分は教える人で、外に教えられる人がいるということではなく、教育という「事業」を通じて、全員が教えられ育てられる「修行」の世界に生きることこそが、「真宗による教育」の目指すところではないか。<sup>(33)</sup>

そして、これこそが私達の「光華女子学園」が持つ本来の願い、と言い得るのではないのだろうか。

その意味で、今回私達が出遇った「中村久子」こそは、まさしく本学園の精神を体現した女性であったと思うのである。

#### 註

- (1) 『聖典』六五頁
- (2) 『清沢満之先生のことば』五四頁
- (3) 『聖典』七〇～七一頁
- (4) 『私の越えてきた道』七八頁
- (5) 同右 八四頁
- (6) 『中村久子の生涯』二一六頁
- (7) 『浄塵尼珠』三六頁
- (8) 『NHKウィークリー・ステラ平成九年八月八日号』九二頁
- (9) 『親鸞のおしえ』五七～五八頁
- (10) 『こころの手足』一四六～一四七頁
- (11) 同右 一九八～一九九頁
- (12) 同右 二〇〇頁

- (13) 『NHKウイークリー・ステラ平成九年八月八日号』九二頁  
三島多聞発言より
- (14) 『こころの手足』一九二頁
- (15) 同右 一五六～五七頁
- (16) 『NHKウイークリー・ステラ平成九年八月八日号』九二～九三頁
- (17) 『報恩譚(パンフレット)』一～四頁
- (18) 『浄摩尼珠』六二頁  
三島多聞「後記」より
- (19) 『中村久子の生涯』三～四頁
- (20) 同右 五～六頁
- (21) 同右 一五九頁
- (22) 『こころの手足』二五二～二五三頁  
瀬上敏雄「解説」より
- (23) 『中村久子の生涯』三〇六～三〇七頁  
『無碍の道』抄録より
- (24) 『わが母中村久子』一五三～一五五頁
- (25) 『中村久子の生涯』二八二頁  
『生きる力を求めて』抄録より
- (26) 同右 一八五頁
- (27) 同右 一八七～一八九頁  
『私の越えてきた道』抄録より
- (28) 『「建学の精神」と教育方針』六頁
- (29) この記述については『光華叢書③女性と仏教』所収の「草提希の救い」(安藤文雄)より多くの示唆を得た。
- (30) 『中村久子の生涯』三〇〇頁

(31) 『「建学の精神」と教育方針』六〇七頁

(32) 真宗大谷派関係学校連合会『会報(一九九九年)』五六頁

『建学の精神と宗教教育』(高松信英) 中の引用より(現時点で出典を明らかに出来ていない。現在調査中。)

(33) この記述については、『会報(一九九九年)』所収の『建学の精神と宗教教育』(高松信英) より多くの示唆を得た。

#### 主要参考文献

本稿の執筆にあたり、以下の書物を参考、引用させていただいたことを明記し、深謝するものである。

中村久子(瀬上敏雄編)『「こころの手足」』(春秋社・昭和六十二年新版)

中村久子『私の越えてきた道』(池上社・昭和三十年)

三島多聞編『浄摩尼珠―花びらの一片―』(真宗大谷派真蓮寺・昭和五十七年)

黒瀬昇次郎編述『中村久子の生涯―四肢切断の一生―』(致知出版社・平成六年)

中村富子『わが母中村久子』(春秋社・平成十年)

東本願寺『報恩講(パンフレット)』(東本願寺・平成十四年)

『NHKウィークリー・ステラ平成九年八月八日号』『中村久子特集』(NHKサービスセンター・平成九年)

真宗聖典編纂委員会『真宗聖典』(東本願寺・昭和五十三年)

中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経』(岩波書店・平成二年改訳)

廣瀬果『観無量寿経に聞く』(教育新潮社・昭和三十九年)

光華女子大学真宗文化研究所編『光華叢書③女性と仏教』(光華女子大学真宗文化研究所・平成十年)

金子大栄校訂『教行信証』(岩波書店・平成三年新版)

金子大栄校訂『歎異抄』(岩波書店・昭和五十六年改版)

教学研究所東京分室・歎異抄を聞く会編『歎異抄講座』全四巻(彌生書房・昭和四十六年)

廣瀬果『親鸞のおしえ』(法蔵館・昭和三十八年)

大河内了悟・佐々木連磨編『清沢滴之先生のことば』(永田文昌堂・昭和三十八年)



真宗大谷派関係学校連合会「会報（一九九九年度）」（真宗大谷派関係学校連合会・平成十一年）

京都光華女子大学真宗文化研究所編『聖典』（光華女子学園・平成八年改訂）

光華女子学園総務部『「建学の精神」と教育方針』（光華女子学園・平成十四年）

※本稿作成にあたり、真宗文化研究所職員、長尾重輝氏より中村久子年譜の提供及び多くの助言を頂いたことを記し、深謝するものである。